

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの 作品における二重性 —詩と絵画『天つ乙女』から—

The Duality in Dante Gabriel Rossetti's Works:
The Poem and Painting, *The Blessed Damozel*

海老名 恵

EBINA Megumi

[要旨] Dante Gabriel Rossetti (1828-1882) は、英国ヴィクトリア朝時代 (1837-1901) の芸術運動「ラファエル前派」の中心メンバーのひとりとして知られている。画家としての知名度が高いが、同時にヴィクトリア朝の重要な詩人のひとりとも言われる。画家と詩人という二つの顔を持つロセッティは、後にダブル・ワークス (double works) と呼ばれる同題材を扱った詩と絵画を多数作成している。イタリア系移民の子としてロンドンで生まれ育った彼は、ダブル・アイデンティティーを有し、いわゆるダブル・アイという2つの視点も持っていた。そのため二重性は、ロセッティを語る上での重要なキーワードとなっている。本稿では、特に作品にみられる二重性に注目し、ダブル・ワークスの中のひとつ、詩“The Blessed Damozel”と絵画*The Blessed Damozel* (1875-78) をとりあげ論じる。

1850年にラファエル前派の機関誌 *The Germ* に詩“The Blessed Damozel” (「天つ乙女」) が初めて掲載され、その後、何度も加筆・修正を繰り返したこの長編詩は、この世を去った乙女が地上に残っている恋人を想い、その愛を語り、恋人も地上から彼女のことをうたっているものである。同題名の絵画 *The Blessed Damozel* においても作品上部に天上の国を、ブレデッラと呼ばれる下部に地上を描き、ロセッティ自らデザインした額縁の下部には、詩の冒頭4連が刻まれている。絵画の重要な部分を占める乙女は、天国から棧にもたれて地上を覗きこんでいるようにみえる。地上の恋人は、大地に横たわり乙女がいる天井を見上げているかのようだ。詩で表現されている世界と乙女の描かれかたを分析し、絵画においては、シンボルを読み解いていくことによってそれぞれの作品にみられる二重性について考察する。

[キーワード] ラファエル前派、二重性、ダブル・ワークス、乙女、天国

[Abstract] Dante Gabriel Rossetti (1828-1882) is well known as a member of the Pre-Raphaelites, an important art movement in the Victorian era (1837-1901). His artistic reputation was achieved not only as a painter, but also as one of the greatest Victorian poets. Within the complex *oeuvre* of this multitalented man, there are a number of poems and paintings, called “double works”; which are based on the same subjects. Rossetti's Italian roots and English birth resulted in a “double identity,” and in a sense he viewed the world through *double eye*. Duality is a keyword for studying Rossetti. This paper will examine the meaning of duality in one of his double works, the poem, “The Blessed Damozel” and the painting, *The Blessed Damozel* (1875-78).

“The Blessed Damozel” first appeared in the Pre-Raphaelite's journal, *The Germ* in 1850. It was revised and rewritten several times. The subject of this poem is that a damsel, in Heaven, longs for her lover who remains alive in the world and the lover thinks of her from the Earth. In a painting of the same title, *The Blessed Damozel*,

Heaven is painted on the upper side and the Earth is depicted on the lower side as a predella. The four verses of the poem are inscribed on the bottom part of the frame designed by Rossetti himself. In the painting, the damsel seems to look down upon the Earth, “leaning out from the gold bar of Heaven.” Her earthly lover is looking up at the sky, lying prostrate on the ground. This paper uses the poem as a way of accessing and analyzing the symbolism contained within the painting, and suggests that poems and painting have a powerful symbiotic relationship which is expressed through the concept of duality.

[Key Words] the Pre-Raphaelite, duality, double works, damsel, Heaven

1. はじめに

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-82) は、19世紀ヴィクトリア朝英国における主要な芸術運動である「ラファエル前派」の中心的メンバーのひとりとしてジョン・エヴァレット・ミレイ (John Everett Millais, 1829-96)、ホルマン・ハント (Holman Hunt, 1827-1910) とともによく知られている。画家としての活動やボヘミア的な生活に耳目を集めるロセッティだが、詩人としての顔も持っており、文人としての側面を看過することはできない。何より、本人は、“My own belief is that I am a poet [...] primarily,” (*The Correspondence* 449) 第一に詩人であると語っている。ロセッティの作品には、“double works” と呼ばれる作品群があり、同じ主題を扱った詩と絵画の組み合わせを指しており、両作品はほぼ同時代に描かれている。そのほとんどがソネット (十四行詩) と絵画作品の組み合わせだが、本稿でとりあげる“The Blessed Damozel” は、最初に詩が書かれてから約25年後に絵が描かれ、詩もソネットではなく長詩の形式をとっているため特殊なケースと言える。ロセッティを語る際に忘れてならないキーワードとして「二重性」が挙げられる。イタリアからの政治亡命者であった父親のガブリエレ・ロセッティ (Gabriele Rossetti 1783-1854)、イタリア系移民の娘であった母親フランチェスカ、姉のマリア、弟のウィリアム、妹で詩人のクリスティーナという家庭に育った。父親は、ダンテの研究家でありロンドン大学キングス・コレッジで教鞭をとっていた。ロセッティ自身は、イタリア系移民の子としてロンドンに生まれ、家庭の中では、家族全員がイタリア語で会話し、父親の知人であるイタリアからの亡命者や文人・芸術家が頻繁に家庭に出入りするという特殊な環境で育った。詩人であり画家でもあったことに加えて、イタリア系の血を引く英国人として生まれたことによりダブル・アイデンティティーを有し、いわゆるダブル・アイ (double-eye) という2つの視点も持っていた。それらのことがロセッティの作品に大きく影響していると思われる。本稿では、長詩 “The Blessed Damozel”(1846-81) と絵画 *The Blessed Damozel* (1875-78) をとりあげ、両作品にみられる二重性について分析する。詩は、ダンテ (Dante Alighieri, 1265-1321) の初期の詩集『新生』(*Vita Nuova*) (1292-93) や他の「清新体」詩人の影響を大きく受けており、独特の世界観に包まれた作品である。絵画は、後年になってから自身の詩に触発され描かれたものである。本稿では、詩を詳細に分析し、絵画では、使われているシンボルに着目し、その意味を読み解いていく。文学と絵画、両面からの分析を行い作品にみられる二重性について考察する。

2. 詩 “The Blessed Damozel”

The blessed damozel leaned out

From the gold bar of Heaven (Rossetti, *Collected Poetry and Prose* 11.1-2)

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの秀作 “The Blessed Damozel” は、彼が19歳になる少し前、1846-47年頃に最初に書かれたとされ、その後、幾度となく加筆、修正が加えられた。またこの詩は、最初にラファエル前派の機関誌であった*The Germ* (1850) に掲載され、その後も、ロセッティの詩集*Poems* (1870)、改定版*Poems* (1881) の中に収められているが、本稿においては1881年版の原稿を使用するものとする。ウォルター・ペイター (Walter Pater) は、ロセッティの作品について以下のように述べている。「その詩のいくつかが文字どおり公刊される前からすでにこの上ない名声の類を勝ち取っていた」(205)。とりわけ “The Blessed Damozel” は、「実のところ1870年以前に二度印刷されたことがあるにもかかわらず、手稿の形で熱心に読まれていた」(205)。このように正式な出版物として読者に提供される前からロセッティの詩作品は、関心を集めていたのである。この詩では、すでに天上へと召された乙女が地上に残してきた恋人を想い、一日も早く自分の世界 (天国) へとやってきてくれることを願う愛が描かれており、彼が天国へきてくれたらどうふるまうのか、聖母マリアや神、天使たちにどのように彼を紹介するのかをその独白の中で語っている。語り手と乙女の独白、それに呼応する地上の恋人の語りから構成される詩の形式は、乙女の独白部分が引用符で囲われ、一方、恋人のことばは、丸括弧 () で示される。ダンテとエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) の「大鴉」(1845) に着想を得たこの詩においてロセッティは、ダンテのように寓意的で想像力に富んだ天国を描くことに成功しており、カトリックと中世の時代に基づいた——英国国教会の理念下にもみる近代キリスト教的天国ではない——世界を表現し、地上と天上との愛について語っている。

1845年1月、*The Evening Miller* に掲載されるとすぐに「大鴉」は、好評を博し、ポーは、アメリカ合衆国内のみならずヨーロッパ中で一躍、名を知られるようになった。物語では、すでに世を去ったかつての恋人レノアを未だ忘れられず愛し続けている男性が主人公 (語り手) となり、人間のことばを話す一羽の大鴉が彼のもとへと現れる。大鴉は、Pallas (ギリシャ神話Athena女神) の彫像の上に止まって、「二度とない」(“Nevermore”) だけを繰り返し、主人公は、次第に正気を失っていく。ロセッティは、ポーの作品について弟子のホール・ケイン (Hall Caine, 1853-1931) に次のように語っている。

I saw [...] that Poe had done the utmost it was possible to do with the grief of the lover on earth, and so I determined to reverse the conditions, and give utterance to the yearning of the loved one in heaven.” (Caine 284)

自らの詩の中で、ポーのアイデアを逆転させ天国にいる側に声を与え、独自の天上と地上を描こうとしたことが見てとれる。「大鴉」は、ロセッティにとって最も影響を受けたポーの作品であり、その影響は、文学作品にとどまらず、1846年から1848年にかけては、“The Raven: Angel

Footsteps”と呼ばれる4枚の素描も描いている。

“The Blessed Damozel”における天国には、中世的な特徴がみられ、以下のような描写が例に挙げられる。

It was the rampart of God's house
That she was standing on;
By God built over the sheer depth
The which is Space begun;
So high, that looking downward thence
She scarce could see the sun. (ll.25-30)

オックスフォード英語辞典 (O.E.D.) によると動詞 “rampart” は、“fortify” と定義され、ハーンも次のように述べている。“*Rampart*” “means part of a fortification; all the nobility of the Middle Ages lived in castles or fortresses, and their idea of heaven was necessarily the idea of a splendid castle” (Hearn 55-6). ロセッティの詩は、城壁で囲まれた中世の要塞都市や城といったものを想起させる。また“shrine”について言及されている詩の箇所がある。

We two will stand beside that shrine,
Occult, withheld, untrod [...] (ll.79-80)

これについてもハーンの言及があり、“*Shrine*. The Holy of Holies, or innermost sanctuary of heaven, [was] imagined by medieval faith [...]” (Hearn 59). 中世と関連付けられる。つまり “The Blessed Damozel” では、時空を超えた中世的特色をもつ天国が描かれているのだ。

翻って、地上はどのように描かれているのだろうか？ 地上に関する描写は、語り手、乙女のいずれからも聞こえてこない。残された恋人の声だけがそれを語る。

Nothing: the autumn fall of leaves:
The whole year sets apace. (ll.23-4)

「何でも無い。秋の落ち葉」「一年が早く過ぎていく」と書かれていることからこの地上には「季節」、「時間」があり、加えて、「昼と夜」、「音」が存在していることも以下のスタンザから見てとれる。

(Ah sweet! Even now, in that bird's song,
Strove not her accents there,
Fain to be hearkened? When those bells
Possessed the mid-day air,
Strove not her steps to reach my side
Down all the echoing stair?) (ll.61-6)

「鳥の歌の中に彼女の声が聞こえてはなかったか？」「あの鐘(の音)が真昼の空気に広がったとき、彼女の足音がこだまする階段を下りて近づいてこようとしなかったか？」と地上の恋人はつぶやいていて「鳥」、「鐘」、「足音」、「こだま」の音が伝わってくる。また「昼」の存在に言及することによって相対する「夜」の存在をも知らしめる。ロセッティが、地上における音や時間の流れを強調していることがうかがい知ることができ、「秋の落ち葉」や「鳥」からは、自然 (Nature) を感じとることができる。中世的で想像力に富んだ天国に対して自然、音、時間を強調した地上

を表現したのだ。“The Blessed Damozel”の中では、天上と地上という場を用い、空想と現実、超自然性と自然とが同時に描かれていると言える。

次にもうひとつの二重性——魂と肉体——についてみてみよう。乙女と恋人が共に持ち併せている声に注目したい。この詩が書かれた当時、人は、死ぬとその魂が体から抜け去り、天に昇っていくものとされ、物理的に肉体を保持しないものと考えられていた。乙女は、すでにこの世を去っているのだから魂としてのみ存在しているはずだが、興味深いことに、ロセッティは、彼女に血と肉体を与えている。

And still she bowed herself and stooped
Out of the circling charm;
Until her bosom must have made
The bar she leaned on warm (ll.43-6)

乙女は、「体を前にかがめ、のりだす」(l.43)「その胸がもたれた棧を温めるまで」(ll.45-6)と語られることからロセッティによって肉体を与えられ、血が通うことで体温を保ち、棧を温めることができる。つまり、肉体を失った「魂」が再び物質化していると考えられる。物質と精神 (spirit) を区別することへの否定は、ロセッティらしさの神髄であるだけでなく彼に影響を与えた中世の教会の特色でもあった (Riede 31)。実際に、中世の教会は精神と物質のマニ教的対立やその結果として生じる人々の人生に対して反対の立場であった (Pater 236)。ロセッティにとって魂と肉体——物質と精神——とは、明確に分けることができるような完全に異なるものではなかったということになる。異なっているが全く同じというわけでもない。「同じだが同じでない」(Brown 273) 曖昧さがロセッティ作品の根底にあるため神秘的、幻想的な印象をより与えているのだ。“The Blessed Damozel”の中で「断言されつつも否定」されているのがまさしく「ダイコトミー」だという (Brown 273)。魂と肉体という従来は相反するものと捉えられがちな概念をロセッティは、独自の手法で重ね合わせている。

では、どのような詩の世界観、宇宙観がみられるのか？これまで天国について考察した結果、そこには、中世的な特色がみられた。天国には乙女がもたれかかっている “the gold bar of Heaven” があって「乙女が立つ神の家からはずっと下に位置する太陽がかるうじて見える」(ll.28-9)。ここにロセッティの宇宙に対する概念を見て取ることができ興味深い。以下のように、「昼」と「夜」、「時間」と「空間」があり独特でイマジナティブな世界となっている。

Beneath, the tide of day and night
With flame and darkness ridge
The void, as low as where this earth (ll.33-6)

『D.G.ロセッティ作品集』の訳者、松村の解説によるとロセッティの宇宙観とは、「中世までの天動説の宇宙観」であり、乙女がいる天国の館は宇宙の一番外側に位置し、そこから「下」の奈落のようなところに地球は位置することになる。「非科学的」な宇宙をありありと描写しているという (365-66)。近代科学がめざましい発展を遂げていたこの時代にロセッティは、敢えてプトレマイオスの天動説を応用し、神秘的かつ超自然的な世界観を醸しだしている。天国は、「神秘と驚き」に満ちて、「天空の空間 (エーテル) の海」に浮かんでいる。その空間を魂が「燃え立

つ炎のように」過ぎていき、まさにspiritualな表現である (Hearn 65)。一方、乙女は、実在性を有している。彼女は、金色の髪の毛を有し、ローブを纏い、手に百合を持っている。その胸は天国の棧を温めることができるというまさに人間的な描写がされている。もし恋人が天国に来てくれたら抱き合うこともできるし、一緒に寝そべることもできると言っており、その思考は、「実体のない類のものではない」(Hearn 65)。つまりロセッティが詩の中で描いた世界は、超自然と自然 (supernatural and natural)、霊的と肉体的 (spiritual and physical) という独自の二重性を持っている。

3. 絵画 *The Blessed Damozel*

次に絵画作品*The Blessed Damozel* (図1)(1875-78)を分析する。自身の詩を素材にして描いた唯一の絵画であり、その注文は1871年2月にパトロンひとり、ウィリアム・グレアム (William Graham) によるもので1877年に完成した。プレデッラと呼ばれる下部のパネルは、ルネサンス様式の祭壇背後に付された装飾に似ており、1877年にグレアムの要求に応じて後から付け加えられた。ウォー (Evelyn Waugh, 1903-66) が「ロセッティの簡素で甘美な初期の詩が後年になり再び彼を魅了したことは興味深い」(200) と述べているように、最初に詩が書かれてから約25年を経て、今度は絵画に息が吹き込まれることになった。この作品には1860年代以降のロセッティの円熟したスタイル——16世紀のヴェネツィア派の影響が濃くみられ、その特徴は、画面内の浅い空間を人物の半身像が大きな比率を占め、鮮やかな色彩で官能的な女性が多く描かれる——をみることができる。清新体を彷彿とさせる詩風で書かれた「簡素で甘美な」初期の文学作品、そして後期のシンボリックで寓意的な絵画作品、2つの同主題の作品から受け取るイメージの隔たりは、時間の経過とともに変化したロセッティの作風そのものであるといえよう。

絵の中心となるモデルは、お針子をしていたアレクサ・ワイルディングで、ケルビム (智天使) には、地元の教会区司祭の息子 (Wilfred John Hawtrey) を、左側の天使は、おそらく、ウィリアム・モリスとジェインの娘、メイ・モリス (May Morris, 1862-1938) を採用している (McGann)。シンボルに注目しながら絵をみてみよう。乙女は、緑色の衣装を身に纏っており、以下のようなアトリビュート (持ち物) がみられる。手に3本の百合の花、髪には7つの星、さらに両脇に薔薇が、背後には、抱き合う恋人たちが描かれている。2人の天使は棕櫚の葉を握りしめ、“the golden bar of Heaven” の下に配置されている。それぞれが持つ意味を読み解いてみよう。Hall の *The Dictionary of Subjects and Symbols in Art* (以下D.S.S.A.と表記) によると、百合は「マリアと聖女 (処女) と深いつながり」(193) があり、3を表す「the trinity」では、「神は、1つの本質で、父と子と聖霊からなる」(319) と定義されている。これによりキリスト教的文脈を表していることは明らかで、さらに乙女を聖母マリアとみなすことも可能である。同様に「7つの星」の「7」も “Seven Deadly Sins,” “Seven Sacraments,” “Seven Sorrows of the Virgin” のようにキリスト教において意義のある数である。さらに聖母マリアには、「ラテン語 *Stella Maris* (「海の星」)」(D.S.S.A. 299) という呼び名もあり、それは、「Jewish名 *Miriam*」に由来する (D.S.S.A. 341)。しかし、一見するとこの絵の中には6つの星しか描かれていない。これにつ

いて興味深い逸話が残されている。“Rossetti was pleased when Hardinge asked ‘where was the seventh star?’ Round the back, came the laughing reply” (Marsh 506-7).「頭の後ろにある。と笑いながら答えている」ところからロセッティの思惑が見てとれる。つまり7つの星も聖母マリアとキリスト教にあてはめられたものとも言える。薔薇については、「聖母マリアと深い関連があり、特にマリアは“rose without thorns”『棘のないばら』と呼ばれる」と定義されている (D.S.S.A. 277)。聖母マリアのアトリビュートとしての薔薇だということは、想像に難くない。棕櫚は「死に対するキリスト教の勝利のシンボルとして初期のキリスト教会によって採り入れられた。世俗的の主題として、勝利の女神ヴィクトリアが棕櫚を受け取る場面が描かれる」(D.S.S.A. 239)。ロセッティは女神を題材にした作品を多く描いていることでも知られる。彼女たちは、ギリシャ・ローマの女神であったり、ロセッティの“muse”として作品にインスピレーションを与えた女性やモデルであったりもした。棕櫚を描いていることで乙女を勝利の擬人化、女神として描いているとも考えられる。背後に描かれた抱き合う恋人たちは、天上の世界へと上昇している。彼らは魂であるにもかかわらず、抱き合うことが可能な肉体を持つ。乙女と同様に魂と肉体の融合が起こっている。これらのシンボルを読み解くと乙女がキリスト教的な世界—聖なる神の場所—に住んでいることは明らかだ。そして乙女が、百合と薔薇、聖母マリアと女神、という二重性をもっていることも見えてくる。ドゥルーは、“The Damozel is the Goddess of Creation. She is the lily and the Rose. She is Victory the Palm-giver. She is Platonic Beauty [...] . She is Beatrice. All these ideas culminate in the painting of *The Blessed Damozel*” (Drew 294) と主張し、乙女を、百合、薔薇、レバノンの花嫁、創造の女神、棕櫚を与える勝利として捉えている。このように乙女は、単なる二重性に留まらず、複合的な意味をもつ存在として描かれている。

*The Blessed Damozel*の特長として、うっとりさせるような魅惑的な乙女の描写が挙げられる。この点についてウォーが指摘するように、確かに「髪の毛は額にかかり、唇と首はかなり誇張されている」(Waugh 200)。ドゥルーも詩のinnocenceを強調し、後年作成された絵画には、それが消えていることを以下のように述べている。The poem of “The Blessed Damozel” is undoubtedly Rossetti’s best-known piece of verse, and has about it a certain child-like innocence of vision. The painting, however, is laden with Rossetti’s late-style Italianate symbolism with its allegorical and renaissance references, and contains anything but a child-like innocence of vision (Drew 293). 絵画の乙女には、もはや“child-like innocence of vision”が見られない。乙女は、「純粋なエロティシズムの崇高な形」(Bullen 243)を表現している。上記の研究者は、innocenceが消えていることを強調しているが果たして本当にそうなのだろうか？すでに述べたように絵画をみたときに受ける印象と、詩を読んで感じるこの間には隔たりがある。しかし白百合が描かれていることによってpurityを表象し、官能的な魅惑とは相反する純粋さ (purity) をも備えていることが呈示できている。魅惑と純粋さの共存は、乙女の資質における二重性を示しているのだ。

絵画上部で天上を表現しているのに対して、下部のプレデッラでは、地上の世界を描いている。乙女の恋人は、木々に囲まれ地面に横たわっており、背景には池が見える。1878年2月10日付のロセッティからジェイン・モリスに宛てた手紙の中でこの作品についての言及がみられる。 “[I]

am getting to finish with the predella of Graham's eternal B[lessed] d[amoze]l. Damozel picture; the predella representing the lover lying in an autumn landscape and looking upwards” (Rossetti, *Dante Gabriel Rossetti and Jane Morris* 50). 詩と同様に絵画においても“autumn landscape”を扱っていることがわかる。池や木々が描かれていることは、自然の風景を表現し、また「樹木」は、季節とともに死と再生を繰り返すことから、「大地の豊かさ」を暗示する (*D.S.S.A.* 317)。この作品に対してロセッティはかなり満足していたことが1878年3月5日付の手紙に書かれている。

I know the picture does look well now altogether. I have vastly improved it by adding roses in the hedges, aureoles round the heads, etc. And enlivening the whole colour which is now most deep and brilliant at same time; and the predella vastly enhances it, being too a fine picture in itself—one of my very best. (Rossetti, *Dante Gabriel Rossetti and Jane Morris* 56)

実在の世界をプレデッラに描き込むことで、幻想的で神聖な天の世界がより引き立つ。2つの世界は、物理的に額の中で仕切られることによって視覚的に対比することが可能となった。この視覚的な対比は、鑑賞する者に先入観を与える。というのも視覚的情報によって鑑賞者は、乙女が住む場所（天国）が上部に位置されることを当然のことと捉え、彼女のことも肉体を持った存在（一人の女性）とみなす。そのため詩の中に書かれる乙女と恋人のモノローグがこのような形で上部と下部で起こっていることを理解する。視覚（絵画）が詩の理解の助けとなっているのだ。このようにHeavenとEarthという2つの世界が1枚の絵の中に収められ、地上の自然に天上の超自然空間が呼応する。

では、絵画*The Blessed Damozel*に描かれる世界はどうだろうか？ これまでみてきたように、乙女はエロティックかつピュアに表現されているが、詩の中では、描かれている宇宙、時間と空間を意図するものが絵の中には見当たらない。鑑賞者がシンボルを読み解くことによって天国が表されていることは理解可能だが、絵を一瞥しただけでそれとわかることも難しい。詩“*The Blessed Damozel*”と絵画*The Blessed Damozel*は、いわゆる“double works”と呼ばれる作品群のひとつとみなされているが、詩と絵画の間のイメージの隔たりが大きいと、これらの作品は、「本質的にそれぞれの独自性をもつ」(Bullen 243)と指摘されている。次にこの絵画作品の形式に着目してみよう。作品は額縁の中に2枚の絵（天と地）が一緒に収められており、額縁のデザインもロセッティ自身によるものだ。そしてその下部には、詩の最初の4連(II.1-24)が刻まれている。最初に絵を単なる絵画作品としてみた時、おそらく鑑賞者には、ロセッティが意図したことのほとんどが理解できないだろう。ここで絵を観た者の自由な解釈が成り立つ。つまりブレンが指摘するように独立したアートとしてみるができる。しかし、近づいて額縁に刻まれた詩の冒頭を読んだならば、乙女が天国の“the gold bar”から身をのりだし神の元にいること、地上にいるのは、恋人で彼女を想っていることを知る。そうしてもうひとつの解釈が生まれる。つまり絵を観たとき、刻まれた詩を読んだとき*The Blessed Damozel*という作品そのものにそれぞれ2つの解釈が存在することとなり、この点においてもロセッティ作品の二重性がみられると言えるだろう。

4. おわりに

詩“The Blessed Damozel”の中でロセッティは、イマジナティブで中世的な天国と自然の中に存在する地上の世界を描写することで超自然と自然（supernatural and natural）、空想と現実（fantasies and reality）という二重性を示した。またロセッティにとって「魂」は、永遠のテーマであったのだが魂となった乙女を具現化することにより魂と肉体との二重性を呈示している。魂と肉体（soul and body）の融合は、すなわち精神と物質（mind and matter）との融合であり、明確に分けることのできないものとして捉えることができる。独特な筆致で描かれた世界は、霊的でもあり肉体的（spiritual and physical）でもある。絵画*The Blessed Damozel*においては、乙女が百合と薔薇（Lily and Rose）、聖母マリアと女神（Blessed Virgin and Muse）の二重性を持ち、その性質にも純粹さと魅惑（purity and allurement）の両方がみられる。ひとつの作品の中に2枚の絵が収められ、そこには、天上と地上が描かれ超自然の世界に自然の世界が呼応している。また作品の形式に眼を向けると、額縁に刻まれた詩の一部によって観る者の解釈を二重のものとさせる。

詩人と画家、二つの才能（dual talent）が“double works”という詩と絵画を組み合わせたアートを可能にした。それは、詩の読者と絵の鑑賞者の想像力を発展させ、二重、あるいは、三重の解釈を引き出すことにもなった。ロセッティは、作品における二重性を通して解釈や真実がひとつではないことを私たちに訴えているのではないだろうか。ロセッティが呈示した二重性とは、明確に対立するものではなく、重なり合い、あるいは、融合するものなのである。



図1 Rossetti, Dante Gabriel. *The Blessed Damozel*. (1875-78)

Oil on canvas, 136.8×96.5cm

Fogg Art Museum, Harvard University, Cambridge,

Massachusetts; Bequet of Grenville L. Winthrop

Works Cited

- Brown, Thomas H. "The Quest of Dante Gabriel Rossetti in 'The Blessed Damozel.'" *Victorian Poetry* 10-3 (1972): 273-77. Print.
- Bullen, J. B. *Rossetti: Painter and Poet*. London: Frances Lincoln Limited, 2011. Print.
- Caine, T. Hall. *Recollection of Dante Gabriel Rossetti*. Boston: Roberts Brothers, 1989. Print.
- Drew, Rodger. *The Stream's Secret*. Cambridge: Lutterworth, 2007. Print.
- Hall, James. *Dictionary of Subjects and Symbols in Art*. 2nd. ed. Philadelphia: Westview, 2008. Print.
- Hearn, Lafcadio. *Appreciations of Poetry*. Amsterdam: Fredonia, 2002. Print.
- Marsh, Jan. *Dante Gabriel Rossetti: Painter and Poet*. London: Weidenfeld, 1999. Print.
- McGann, Jerome. "The Complete Writings and Pictures of Dante Gabriel Rossetti: A Hyper Media Archive." *Rossetti Archive*. 2008. Web. 10 Sep. 2017.
- Pater, Walter. *Appreciations: With an Essay on Style*. London: Macmillan, 1927. Print.
- "Rampart." *The Oxford English Dictionary*. 2nd.ed. 2009. CD-ROM.
- Riede, David. *Dante Gabriel Rossetti Revisited*. New York: Twayne, 1992. Print.
- Rossetti, Dante Gabriel. *Dante Gabriel Rossetti: Collected Poetry and Prose*. Ed. Jerome McGann. New Haven: Yale UP, 2003. Print.
- . *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti Vol.4: The Last Decade 1873-1874*. Ed. William E. Fredeman. Cambridge: D. S. Brewer, 2003. Print.
- . *Dante Gabriel Rossetti and Jane Morris: Their Correspondence*. Ed. John Bryson. Oxford: Clarendon, 1976. Print.
- Surtees, Virginia. *The Painting and Drawing of Dante Gabriel Rossetti: A Catalogue Raisonné*. London: Oxford UP, 1971. Print.
- Waugh, Evelyn. *Rossetti: His Life and Works*. London: Methuen, 1991. Print.
- ロセッティ、ダンテ ゲイブリエル 『D.G.ロセッティ作品集』南條竹則、松村伸一編訳、岩波書店、2015.